

創学舎ニユース

No.241

世界が敵に

まわった日(その9)

これまで、8回にわたって自分の子供時代の一部を紹介してきた。今思えば単なるはずみすぎないが、いじめから始まった不登校、病氣、貧困、世の中の冷たい視線。一方で私を支えてくれた多くの人達のこと。「世界が敵にまわった日」と大仰なタイトルをつけたが、ふり返れば大したことではない。ただ、その時は本当に苦しくて、まさに「世界」を「敵」に思っていたことも確かである。

さて、高校を卒業し進学のために上京するのだが、それから経験した様々な出来事、いろんな人との出会いというのは、「世界」を「敵」とみる私の偏狭さを矯正してくれたといえよう。(念のために申し添えておくが、私はノンポリで支持政党もなく、信仰する宗教もなく、右も左も関係なし。尊敬する政治家は故石橋湛山。(水俣病の患者の人、山谷で暮らす人達、HIVの人、阪神・淡路大震災の被災者の人達…。話を聞けば、事実を知れば、定番通りのことを思わされた。「自分の体験なんて、蚊にさされたよ

うなもんだ。」「この人達の背負っているものほとんどでもない。」「そのうえ重い荷物を背負いながら、もひょひょひょひょとした表情を見せられたり、前向きな生き方を教えられたり逆に励まされたりする」と、もう言葉がない。勿論、彼等の人生の中には、そして一日にも苦悩・煩悶の時間はきつとあり、今でもあるのだろうが、それでもいろんな選択をしながら支え合って懸命に生きていこうとする在り方は心を打った。

一方で、日常の生活の中では、これまた多くの人に支えられた。上京してからの浪人生活も学校生活も恥ずかしくて人に言えない程長かったのだが、そしてまさに「銭形金太郎」のような生活を送っていたのだが、とにかくよくおごってもらった。週に一回は、誰かの家と呼ばれて夕食をご馳走になっていた。アカの他人である自分に、何でこんなにしてくれるのだろうかと思つ程、大事にしてもらった。感謝感謝。今になってやっと分かることだが、私の生は(その心も肉体も)まさに色んな人達に支えられてあったのだ。(以下次号)

(小林)

教育「名言」の紹介(15)

一(いつ)にして萬(ばん)は(ん)に(ゆ)く(え)い(わ)を(博)学(はく)は(く)と(謂)い(つ)。萬(ばん)に(して)又(萬)之(を)多(た)学(がく)と(謂)つ。

解釈 一つ専門を基準にして多方面の学に及ぶ、これを博学と言つ。雑多の上にさらに多方面の学に至る、これを多学と言つ。

《出典》伊藤仁斎(いつじんさい)(江戸・一六七 一七〇五『童子問(どうじもん)』)

解説 仁斎は、『論語』『詩経』などはもとより歴史書、短編小説集にも及ぶ広範な範囲の中国書を読み、中国の歴史と百般の事物に対し広い正確な知識をもつ、当時の日本における卓越する博学者であった。この仁斎にして見出しの言葉が言われている。

仁斎は、次のような比喻を挙げて博学と多学を説明する。博学はちょうど根を張った樹木のようなものである。樹木は、根から幹が出、幹から枝が出、枝から葉や花や実をつけ、生い茂るといつても、根から摂取した水分や養分が行き渡らないところはなく、大きくなればなるほど一層どこまでも流れ込んで行き渡るのである。これに対して多学はちょうど布ぎれで作った造花のようなものである。枝も葉も花も実も、押し合いへしあいし、いつぱいに咲き乱れて、美しく見えるが、乾燥し枯れていて、養育されて成長させられることはない、と。

学問をする上であくまでも必要なことは専門分野をもち、そこから関連する分野をも学び取り、その豊かな教養をもって再び専門分野を一層深めることである。ただ単に広く、手当たり

次第に学び多くの知識をもつことではないのである。(アガトス教育研究所)

型と意味

生物

ヒトデはなぜ星型なのか。

進化の過程で(淘汰の過程で)あの星型が彼らの環境に適していたからだ。(ダーウィン・反ダーウィン、競争原理派・協調原理派、ドーキンス・グルルドのそれぞれの主義主張もあります)

動物植物は自ら求めてその型になろうと意図したわけではないが、その型には、結果的に、「適応」と「種の保存」という大いなる意味が含まれている。

道具

フォークの歯はなぜ四本なのか。マンホールの蓋はなぜ円いのか。F1の車の後輪はなぜ前輪より大きいのか。

これらには人間の意図がある(当たり前だが)。仮説、検証、考察、改善など意図的に追求した結果、現在の型になっているのだ。

教材・部活・創学舎

型には意味がある。君達と私たちの身近な例としては、「教科書英文テスト」や中3数学副教材の「ブクブクノート」などが分かりやすいだろうか。なぜ創学舎の他のテキストのように完

成した冊子ではなく、ハサミとノリとノートを使うのか。なぜ英文テストの採点は鬼のように厳しく、「これくらい見逃してよー」ととりあえず言ってみても見逃してもらえないのか。なぜ途中式をきちんと書かせるのか。「教科書英文テスト」も「ブックノート」も、実は二十年以上(！)の検証・考察・改善の歴史があり、当然その型にはそれだけの意味がある。

物的なものだけではなく、授業中の姿勢(椅子への座り方、解説を聴くとき顔を上げるなど)や言葉・言葉づかひにも意味があるので、私たちは真剣に(おそらく君達にとっては、うるさく)伝えていくつもりだ。

ピアノでも書道でも、スポーツでも武道でも、何かを身につけようとするとき、そこには無視できない型がある。それはフォームであったり、用いる道具の扱い方であったり、学ぼう、身につけようという心の姿勢であったり…。

そして型は、習い始めのときほど大きな意味を持つ(ただし、その価値は後になって分かることの方が多い)。君達も、学校の部活動や習い事の教室、クラブチームのフィールドで実感したことがあるのでは。(特に、部活で先輩に何かを教えるとき。)

勉強もピアノも、テニスも、柔道も実は同じ。創学舎は、道場だと思ってもらっていい。

(五口市)

ゆみはりだけ 弓張岳へのぼりながら

田舎へ帰ると必ず会う友人Sがいる。高校の同級生と一緒にバンドも組んだ仲間だ。現在は地元で小学校の教師をしている。今年の夏に帰省したときも彼が迎えてくれた。

「どこに行きたいか」と聞かれて、私は「弓張に行こう」と答えた。海に面した私の町、長崎県佐世保市は背後を山に囲まれ平地が少ないのだが、弓張岳にある展望台からはその全てが見渡せるのだ。時刻は夕暮れ時だった。この時間の眺望は息を飲むほど美しい。

車が繁華街を抜け、坂の多いこの町特有の曲がりくねった細い道路を上っていく。言葉は地元の名なりに戻り、友人たちやこの町の状況と、他愛もない思ひ出話に花を咲かせる。遠く離れた土地に住んでいるからこそ生まれ育った土地が愛しいと思う。東京で暮らした友人の何人かは、この町に戻ってきた。社会人として働くようになってしばらくすれば、みんなそれぞれにいろんなかたちの人生を歩んでいるものだ。結婚をして子供をつくり立派に家庭を築いている友人。逆に結婚生活を終わらせてしまった友人。連絡先も分からなくなってしまう友人。遠く台湾でパチンコ店のオーナーになった友人

もいる。

Mは、体も小柄で、あまり自立つようなタイプではなかった。そんな彼が、学生時代に突然陶芸の道に入ったと聞いて、おせっかいとは知りつつ心配したのは多分私だけではなかった。しかし、現在では自分の工房を主宰する一人前の芸術家として頑張っている。私は、その一念の強さにただ驚嘆するばかりだ。

そして、そんな彼の記事を地元のミニコミ誌に書いているのも同級生のYだ。地元で頑張っている彼等の存在が、時にはまぶしく、そして心強く思ふ。

そんなことを考えていたとき、左手に白く新しい建物が見えてきた。それが何なのか、数年前に帰郷した私にもすぐ理解できた。それは、一時期、毎日のようにテレビに映し出されていた建物だった。その小学校に今は報道陣の姿もなく、校庭では子供たちが無邪気にキャッチボールをしている。「あのときは俺もニュースを見て初めて知ったとき。嘘やろって感じやった。ばってんが、正直なところ、同じ市内でもまるで別の惑星で起きた事件のごたる感じさ。現実感がないっていつかね。子供たちの反応も同じだった。」Sはそんなことを言った。私も事件を知ったときの衝撃は忘れられない。何しろ、現場はありふれた地方都市のどこにでもあるよ

うな小学校なのだ。かつての佐世保と言えば、週刊誌さえ一日遅れで発売されるような文字通り中央から離れた日本の西端であった。しかし、今やこんな地方の小学校でさえネット普及率一〇〇%と聞いて、私は認識を改めなければならなかった。もはや東京と地方のタイムラグは存在せず、都市の流行はすぐに伝播する時代なのだ。

事件のことを話しながら、私とSとの間に、教育への考え方に隔たりがあることを感じていた。ある部分では共鳴したが、ある部分では受け入れられないものがあつた。また、Sの言葉には塾に否定的な響きがあつて、そのことは軽い動揺を私に与えた。

だが、と思ふ。私もSも、子供のような自由を叫んではしゃいでいた頃とは違つ。互いに教えるという仕事を運び、現実を相手にしている。追い求め方こそ違つが、私もSもあるべき理想に向かつて戦う同志であることに変わりはない。坂の下の薄暮の町に、灯りがともり始めていた。再び日常に戻ったとき、私はたびたびSの言葉を思い出すだろう。俺達は大人になったのだ、と感じた。(関)

卒業や転校等で創学舎を離れる方にも、「ご希望があれば、創学舎ニュースを無料でお送り致します。在籍した教室までご連絡下さい。」